

Title	Mr. Wonkaの怪物的な工場 : Charlie and the chocolate factoryにおける1960年代フォーディズム批判
Sub Title	Mr. Wonka's monstrous factory : a criticism on the 1960s Fordism in Charlie and the chocolate factory
Author	中迫, 史音(Nakasako, Ayane)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2024
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.126, (2024. 6) ,p.151 (34)- 161 (24)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01260001-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Mr. Wonkaの怪物的な工場

—Charlie and the Chocolate Factoryにおける
1960年代フォーディズム批判—*

中迫 史音

Roald Dahlの作品群、とりわけ子ども向けに執筆された作品群は、これまで児童文学研究において Ann Alston や Pat Pinsent、Tony Watkins らが指摘してきたように、大人と子どもの逆転した力関係や、その対抗文化的要素が主に論じられてきた (Alston 99–100; Pinsent 81; Watkins 307)。なかでも Dahl の初期の重要作品である *Charlie and the Chocolate Factory* (以下 *Charlie*) にみられる社会・政治批判的側面を論じた研究としては、1988年の David Rees によるものが代表的で、Rees は、奴隷労働に支えられた工場経営者という資本主義の許されざる側面を体現した人物として Mr. Wonka を分析した。さらに近年では、後期資本主義の社会的文脈において *Charlie* を分析し、植民地主義、利根的な消費主義への批判の観点から作品を読む傾向がある。David Rudd、Catherine Keyser らの論考がこれにあたるが¹、後期資本主義の中心的要素であるフォーディズムの観点から詳細に作品を、特に作中の工場描写の意義を分析した研究はまだほとんどない。

1964年にアメリカの Alfred A. Knopf から出版された *Charlie* は、「今までにない驚くべき商品を製造する、チョコレート工場の話——奇抜な男が経営？」という作者の数行のメモ書きから誕生した作品で (Dahl, “Lucky Break” 235)、描写の残虐性が一部批判を浴びつつも²、1960年代当時、作品は英米両国で人気を博した (West, *Roald Dahl* 66–67)。工場見学をめぐる冒険譚を描いた *Charlie* には、執筆当時の社会状況が色濃く反映されており、1920年代以降アメリカを中心に普及したフォーディズムの特徴をもつ工場風景の描写や、それに伴う大量生産・大量消費を想起させる場面が作中には多く登場する。こうした描写の中心に存在するのが、世界中に名を轟かせる大工場、Mr. Wonka のチョコレート工場であ

る。DahlはMr. Wonkaの工場内部の機械をたびたび「怪物的」と形容する一方で（*Charlie* 66, 98）、大量生産・大量消費の文化を享受する一部の登場人物たちをこそ、異常な所有欲にとらわれて制御を失った怪物のような存在として描き、最終的には彼らを消費物と同じ工程で工場内で処理する。このとき、Mr. Wonkaの工場に向けられた「怪物的」という語は初めて多重性をはらみ、工場そのものについても、Keyserが指摘するような「現実主義のユートピア」³とは異なる側面が浮かび上がる（405）。登場人物を通して、消費者の飽くなき欲望を再生産し続ける、フォーディズムに支えられた資本主義の社会システムの制御不可能性を比喩的に示すと同時に、一見共通する「怪物的」要素でもって彼らを誘い込む工場は、そうした社会システムすらも飲み込み、断罪する装置として作中で機能するのだ。本論では、作中において主に生産側と消費側をつなぐ「怪物的」という語の多重性を読み解きつつ、フォーディズムの観点から物語構造および1960年代の大量生産・大量消費文化をめぐる描写を詳細に検討することで、フォーディズム批判の表象としてのMr. Wonkaの工場像を考察し、*Charlie*の新たな解釈の可能性を探る。

そもそもフォーディズム（Fordism）の用語は、Henry Fordが1903年6月に創設した自動車会社Ford Motor Companyでとられた大量生産のための製造工程を指していた。この製造工程によって低価格化が実現したT型車は、1920年代に入ると会社の代名詞としてアメリカで広く普及したが、Ray Bachelorによると、それより以前の段階からすでに大量生産は「フォーディズム」と呼ばれていた（45）。自動車会社創設以前、他社で作業手順の単純化などの功績を上げていたFordは（Bachelor 17）、会社創設後も効率性と円滑な流れを重視した製造工程を編み出し、1920年代頃から現代に至るまで、自動車製造業のみならずあらゆる製品製造業に多大な影響を与えた。

Fordが取り組んだ大量生産方式の特徴として挙げられるものは、主に作業の単純化、移動式組立ラインの導入、製造商品の普遍性と均一性であろう。作業の単純化については先述の通りであるが、19世紀アメリカですでに取り組まれていた「熟練した職人の依存度を軽減するシステム」の構築もFord社の自動車製造にみられ（Bachelor 41）、このシステムが均質な製品の大量生産をもたらした。また、こうした作業は分業形式で行われ、移動式組立ラインの導入とともに、製造作業はいっそう円滑で経済性の高いものとなり（44-46）、Fordは消費

者には低価格で自社製品を提供し、従業員には高賃金を支払うことを実現した。やがてフォーディズムは、Ford自身の理念とも重なり、自社で労働者の面倒をみる「家族のような」精神性をはらむようにもなったのである（Piatti-Farnell 6）。さらに、Fordは自社労働者も顧客として認識しており、早い段階から彼らを生産と消費のシステムに取り込んでいる点も特徴的である（Batchelor 47）。

一方、イギリスの自動車製造業においてFord社の大量生産方式が導入されたのは1914年で、アメリカ国内ほどの成功は成し得なかったものの、導入前年と比較すると、10年後のイギリスにおけるFord社の自動車総生産高は大幅に向上しており（72-73）、イギリスの製造業にフォーディズムが多大な影響を及ぼしたことは間違いない。*Charlie*が出版された1960年代イギリスにおいても、大量生産とそれに伴う大量消費の傾向は色褪せておらず、このことは消費者団体の設立や消費者運動といった事象からも窺い知ることができる。特に、現在ロンドンに本部を置き、英米を含む5か国の消費者団体を中心に1960年に創設された国際消費者機構は、消費者の利権問題に対する当時の意識の高まりを示していると言えよう。

こうした社会背景のなか執筆された*Charlie*には、フォーディズムを想起させる工場が、Mr. Wonkaの工場以外にもいくつか登場する。まず挙げられるものは、作品冒頭に登場する、主人公の父親Mr. Bucketが勤める歯磨き粉工場である。Mr. Bucketは、工場で「一日中作業台に座り、歯磨き粉を詰め終えたチューブに、小さなキャップをはめ込んでいく」ことを仕事とする（Dahl, *Charlie* 7）。家族を養えないほどの低賃金労働である点は、初期のフォーディズムの様相とは異なるものの、Mr. Bucketの労働風景は、まさにフォーディズムの組立ラインに並ぶ工員のそれであり、彼は分業化・単純化された仕事のうちの一つをただ淡々とこなすのみだ⁴。また、Mr. Wonkaの工場見学の招待状を手に入れた子どものひとり、Veruca Saltの父親Mr. Saltが経営する工場も同様で、ピーナツ製造販売を生業として成功するMr. Saltは、工場に100人ほどの女性従業員を雇い、工場で彼女たちに日々加工用のピーナツの皮を剥かせ続けている（30）。これらの工場は、FordがT型車のために大量生産方式を展開したように（Batchelor 66）、単一の目的の下、熟練度を不要とする労働によって標準的な商品を大量生産している⁵という点で、まさしくフォーディズムの特徴と性質をとらえている。

Mr. Wonkaの工場にも、フォーディズムを模した特徴がいくつかみられる。

世界中に向けて大量の商品を製造し送り出すだけの生産力をもつ点、商品を発明する工場長のMr. Wonka以外の従業員（アフリカに住む架空のピグミー族 Oompa-Loompaやクルミ割り専門のリスたち）はチョコレート製造に熟練していない点、また、Wonka社の製品は多くの一般家庭の子どもたちに手が届くものである点などが挙げられよう。さらに、リスたちが菓子製造の原材料であるクルミの殻を向く作業に黙々と従事する様子が（116-17）、ピーナツ工場で皮剥きに徹する女性従業員の描写と重なる点も無視できない。自社製品を労働者である Oompa-Loompaたちも消費することや（75）、自社労働者の面倒をみる、まさしく「家族のような」精神性が描き出されていることも、フォーディズムと特徴を同じくするところであろう⁶。

しかし、Mr. Wonkaの工場は、フォーディズムとは明らかに異なる特徴も有している。最も大きな相違点は、Mr. Wonkaの工場が単一目的の商品製造を行わない点であり、「あの人 [Mr. Wonka] はひとりで200種類を超える新しいチョコレート菓子を発明した」と説明されるように、Mr. Wonkaは多種類の商品製造に従事している（Dahl, *Charlie* 13）。また、従業員の Oompa-Loompaの労働の対価としてカカオや自社商品が現物支給の形で与えられる点や、一見単純作業に徹する非熟練工を体現するリスたちが、実のところは、「特別に訓練された」専門作業員として描かれている点は（116）、フォーディズムの特徴とは異なる。

以上のようなMr. Wonkaの工場描写と実際のフォーディズムとの食い違いは、Lorna Piatti-Farnellが指摘するように、*Charlie*のわずか4年前に出版された *Kiss Kiss* に収録の短編“Pig”が、多分にフォーディズムの示唆に富んでおり、そこに痛烈な皮肉と批判の精神が込められている点を考慮しても、Dahlがフォーディズムを強く意識したうえで設けたものと考えてよいだろう。それでは、この食い違いの描写には、Dahlのどのような意図を読み取ることができるだろうか。Mr. Wonkaの工場内部の機械を形容する語として繰り返される「怪物的」な要素を、工場および消費者双方の観点から着目しつつ、以下に考察を進める。

まず、Dahlは、Mr. Wonkaの工場の様子を描写する際に、「怪物的」という形容詞を二度繰り返し用いている。最初の場合は工場見学冒頭で、「ずっと遠くのほう、大きな工場の心臓部からは、エンジンが駆動する唸り声がかくぐもって響いてきた。それはあたかも何らかの怪物的で巨大な機械が猛スピードで歯車を回しているかのようなだった」と描写される（*Charlie* 66）。もうひとつの場面におい

ては、特別なガム製造機を駆動した際の音が「怪物的な力強い唸り声」として形容されるのだ(98)。このように工場の描写を通して繰り返される「怪物的」(monstrous)であるが、そもそも「怪物的」とは、*Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) によると、「怪物に関連した、あるいは怪物に特徴的な」要素をもつ状態を指し、そこには特に「おぞましく、恐怖を掻き立てるような」、「怪物の外見や性質をもっている」という含意がある(“Monstrous”)。また、現在も使用される「怪物」の定義のひとつには、「ゾッとするほど不自然な性質をもった、または非人間的に思えるほどの過度な残酷さや邪悪さを発現する人間」、「邪悪さや悪徳の怪物的な実例」が挙げられている(“Monster”)。

*Charlie*において工場の機械駆動音を指す「怪物的」は、語義通りに解釈するならば、工場を見学する子どもたちにとって、機械音が「恐怖を掻き立てるような」轟音であることを強調した形容であろう。しかし、Charles Chaplinが1936年の*Modern Times*において、フォーディズム式の生産ラインで単純な繰り返し作業に従事する主人公の作業員が、やがて気を狂わせ、工場の機械に危うく飲まれかけるといふ、恐怖を掻き立てる「怪物的」な工場の労働風景を皮肉のかつコミカルに演出したように、*Charlie*においても、一部フォーディズムの特徴を模したMr. Wonkaの工場において次々と見学者が飲み込まれていくさまが描かれる。この点をふまえると、作中における「怪物的」という描写は、機械音に留まらず、工場そのものがもつ、人間存在を容易く飲み込んでしまうような恐ろしく得体の知れない力を指しているとも考えられるだろう。

ただし、労働者が工場に飲まれかける*Modern Times*とは異なり、*Charlie*で工場に飲み込まれるのは、そこへ見学に訪れる子どもたちとその家族だ。黄金のチケットを見つけて招待された彼らは、工場見学の最中で、主人公Charlieを除き、ひとりずつ工場の生産ラインに巻き込まれて姿を消すが、この様子はまさしく「怪物的」な恐ろしさをはらんでいると言えよう。しかし、作中において「怪物的」な存在は、Mr. Wonkaの工場だけではない。同様の形容詞こそ使われないものの、作中にはもうひとつ「怪物的」な存在が登場する。それが、工場の生産ラインに巻き込まれる、*Charlie*以外の子どもたちとその家族である。

「怪物」および「怪物的」の語の含意については、先に*OED*の引用で示した通りであるが、Dahlは*Charlie*以外の見学者を、確かに「おぞましく、恐怖を掻き立てるような」性質をもつ、「悪徳の怪物的な実例」として読者に提示してい

る。たとえば、最初のチケット発見者Augustus Gloopは、過度に食欲旺盛な少年で、Dahlは「体のいたるところから大きな肉のひだがはみ出している」や「欲深い二つの目」などの外見描写からすでに、少年の強い食欲を読者に印象づけている（*Charlie* 26-27）。そして、この少年は、工場内部のチョコレートの滝へやって来ると、Mr. Wonkaの制止も無視して、地面に這いつくばってチョコレートを「犬のようにビチャピチャ舐める」（78）。常軌を逸した少年の食欲を示す動物的な比喩は、その怪物性をことさらに強調している。その後、自らの行動によって川に落ちた彼は、チョコレート・ファッジの製造部屋に繋がる巨大なパイプへと吸い込まれ、その異常な食欲のために身を滅ぼすのだ（80）。

続く見学者たちも、商品への過度な執着によって、Augustusと同様の末路を辿る。次に工場に飲み込まれる見学者Violet Beauregardeは、「どんな瞬間でもガムを噛んでいないとちっとも気分が落ち着かない」ガム中毒者で（37）、Mr. Wonkaの忠告を無視して開発中のガムを試したVioletは、試食の結果、ブルーベリーのようになど青ざめて肥大した体を処理すべく「ジュース部屋」に送られる（105）。また、両親に甘やかされた身勝手な少女Veruca Saltは、あらゆる場面で物をねだるが、特別に訓練されたリスたちがクルミの殻を向く「ナッツ部屋」に至ると、その主張は最高潮に達し、すでに10種類ものペットがいるにも関わらず「あたしはリスが欲しいの！」とヒステリックに叫んで、その強欲さを見せつける（118）。ついにはMr. Wonkaの制止を振り切って、リスの強奪を試みた彼女は、リスに「質の悪いナッツ」（“a bad nut”）として選別されてしまい、両親とともに食材用のダストシュートへ落ちるという結末を迎える（119-23）⁷。4人目の少年Mike Teaveeは、視覚と聴覚を通じて情報という商品を視聴者に大量に送り込むテレビ媒体に過度な執着心をもつ、テレビ中毒者である。彼もまた、チョコレートを各家庭のテレビ画面を介して届けるという画期的な発明を前に欲求を抑えきれず、制止を振り切って行動したことで、体を縮小されてしまい、チューイングガム用の機械へ運ばれることとなる（143）。

こうした「怪物的」な欲求をまき散らす消費者たちの姿は、大量生産と大量消費が進行した1920年代以降の社会においては、非現実的なものではなかった。Batchelorは、先に述べたような消費者運動の高まりを取り上げ、一連の運動を「購買活動や物質的な財の所有に対する過剰な執着」を示すものとして定義し、「個人の目的達成ばかりに重点を置き、集団の責任をほとんど無視している」点

が今日議論的であると指摘する(3)。消費者の過剰な執着は、まさにDahlが*Charlie*を通して描いた姿であり、制御不能の欲求に侵された動物的な彼らの姿は、当時の消費者たちのありようを戯画化して示している。

さらに注目すべきは、子ども消費者たちが、日頃自らが消費している消費物として工場で処理される点である。自己破壊的な大量消費を導くフォーディズムの大量生産に向けられたDahlの批判的視座は、*Charlie*以前からみられた。Piatti-Farnellは、短編作品“Pig”の最終場面で舞台となる食肉加工工場が、Fordが組立ラインの発想を得た場所でもあることに触れ、工場見学に訪れたばかりに豚と同様に血を抜かれ、製造ラインに流されていく主人公の描写を通し、Dahlは消費者イデオロギーの「共食い」的性質に対する文化的な懸念を具体化したと指摘している(13)。*Charlie*においても、“Pig”に類似する物語構造が用いられており、Dahlは、「怪物的」な生産力をもつ工場から絶えず排出される商品を食べ欲に消費し続ける子どもたちを描くと同時に、彼ら自身が固執してきた「消費」の形で彼らも断罪される姿を描き出すことで、大量生産・大量消費のシステムによって助長された、非人間的に過激で自己中心的な欲求を、鋭い皮肉を込めて、同じく消費者である読者たちに印象づけることに成功しているのだ。

このように、Dahlは、子ども登場人物たちを通して食欲な消費者の姿を描いたが、Dahlが根源的に問題視しているのは子どもではなく、大人たちであった。フォーディズムに支えられた社会構造に適応した4人の子どもの両親は、いずれもBucket家よりもはるかに経済的・物質的に豊かな生活を送っており、この点で、彼らは作品当時の大量生産・大量消費の社会システムと文化を体現する存在と言えるが、彼らも子どもたちと同様に問題をはらむ存在として描かれる。たとえば、Augustusの過剰な食欲を止めようとししない母親のMrs. Gloopは「胸がむかむかするような女」と描写され(*Charlie* 27)、Violetの両親は、娘がMr. Wonkaの忠告を無視して開発途中のガムを噛んでも、「その調子だよ、おまえ!」と、娘の身勝手な消費行動をむしろ後押しする(102)。Mikeの両親は、Mr. Wonkaの説明に幾度も息子が水を差しても一言も注意を加えない消極性が特徴であるが、子ども消費者の自己破壊的な欲求を促進する親の問題を、最も顕著に表すのはVerucaの両親であろう。

Verucaの父親は、フォーディズムを模したピーナツ会社経営で富を築く人物で、彼は娘の要望に応えるべく数十万ものWonka社商品を買込み、自社工場

の女性従業員たちに黄金のチケットを探させる (29-30)。しかし、彼らの自己中心的かつ過剰な消費行動は、娘の「怪物」化を助長する行為に他ならず、「あんなふうに甘やかすところくなことになる」というCharlieの祖父の台詞によって、その後の展開は示唆される (31)。問題行動を起こす子ども消費者の描写の意図が明確に示されるのも、Salt家の場面である。リスたちの手で一家全員を焼却炉に続くダストシュートへ落としたのち、Oompa-Loompaたちの歌で「誰があの子 [Veruca] を悪がきにした？」と質問を重ね、「それは (とても悲しいことだけど) / 娘愛するママとパパ」と続けることで (125)、Dahlは、子どもたちの「怪物的」な消費欲求の根本原因は両親である大人という見解を提示している。つまり、次世代における、より動物的な消費欲求を生み出すものは、現在あるいは作品執筆当時の大人たちが構築し発展させ続けてきた、大量生産・大量消費の社会構造に他ならないことを、Dahlはここで指摘しているのである。このとき、当初Mr. Wonkaの工場に向けられた「怪物的」の語は、異常な消費行動を表す子どもたちを通して大人たち、ひいては現実社会のシステムそのものへ鋭く突きつけられる。フォーディズムの要素を部分的に取り入れて巧みに擬態させ、大量生産・大量消費社会にあえて組み込ませる形で描かれた「怪物的」なMr. Wonkaの工場は、実際は、理性的な制御を失った自己破壊的な欲求を次世代へと連綿と生み出す、フォーディズムに基づいた当時の消費社会というもう一つの「怪物的」な製造工場の姿をあらわにしているのだ。

Dahlが、1920代から続く大量生産・大量消費社会の根底に潜む過度な消費と所有の欲求を、人間本性の観点から不自然で受け入れがたい「怪物的」な性質と捉えていることは、4人の子どもの登場人物と対比的に描かれ、最後まで断罪されずに工場見学を終えながら、さらには工場の所有権を約束される唯一の子どもCharlieの描写からも明らかである。貧困にあえぐBucket家のCharlieは、どの子どもよりも飢え、こよなくチョコレートを受する少年であるが、彼の場合は、誕生日に与えられた貴重なチョコレート・バーでさえも、独占せず家族と分け合おうとする姿勢が描かれる (Charlie 35)。ほかの見学者とは異なり、強い共同意識をもったCharlieが最後のひとりとして工場見学に残った時、Mr. Wonkaは工場見学が次期後継者を決める試験であったことを明して、「私は成長してしまった人間はいらないのだよ。彼らは私に耳を貸さない。彼らは学ばない。彼らは私のやり方じゃなく、自分のやり方でやろうとする」と語り、だからこそ試験する相

手は子どもである必要があったと述べる（157）。「成長してしまった人間」は、言葉通り大人とも捉えられるが、ここには、フォーディズムの社会構造とその精神性に染まりきった大人たちのような、子どもの存在も示唆されていると言えよう。唯一その精神性に侵されていないCharlieが、上述の社会構造から弾かれた弱者である点は、非常に示唆的である。

抑圧された弱者が勝利するプロットは、Dahl作品の典型的な物語構造である。*Kiss Kiss*収録の短編作品“The Way Up to Heaven”や“William and Mary”がその代表例だ。しかし、作品の主人公はいずれも大人であり、Charlie執筆時には、子どもをもったことでDahlの社会批判的視座が、その時点の現在のみならず、次世代の社会像にも向かって明確に転換していたのは間違いない⁸。1960年代当時、いまだ根強かったフォーディズムの特徴を部分的に模倣したMr. Wonkaの工場は、大量消費社会に溶け込み、中心的位置を占めつつも、欲求の制御を失った自己破壊的な消費者たちを取り込み、彼らの性質を試すことで、持続性ある社会維持の希望を見出すために彼らを断罪／選別する「怪物的」な装置として作中で機能している。Dahlは、こうした工場の描写を通して、当時のフォーディズムに基づく大量消費社会こそが、怪物のような消費者を次々に製造する「怪物的」な工場であることを批判的に示唆しながら、彼自身の典型的な物語構造を応用しつつ子どもを主要登場人物に据えることで、未来を志向した社会への希望的視座を作中に示しているのである。

註

-
- * 本論における和訳は、文献に邦訳版が記載のあるものについては原文を参照しつつ、邦訳版に適宜変更を加えたものである。邦訳版の記載のない著書からの引用は拙訳によるものである。
- 1 Ruddは、精神分析学の理論を用いて、Charlieに描出される後期資本主義社会の利他的な消費主義を分析し、Mr. Wonkaが資本主義の矛盾を体現した登場人物であると指摘する。Keyserは、チョコレート産業に注目しつつ、植民地主義と後期資本主義の視座から作品を読み解き、両者の通底する人種化の問題を明らかにしている。
- 2 Eleanor Cameronは、1972年10月の*The Horn Book Magazine*において、おそらくCharlieのなかで子どもたちが次々と姿を消す場面の描写を主に指し、「サディズムの含みをもった罰に基づく、わざとらしいユーモア」だと批判している。

- 3 Keyserは、*Charlie*の草稿に触れ、そこに描き出される植民地主義と後期資本主義の根底に存在する奴隷制の問題について、Dahlは主人公の少年を黒人から白人にし、過去を顧みない「現実主義のユートピア」として工場を設定することで、上記の問題の抽象化を試みたと論じる（404-05）。
- 4 2016年6月29日、University of Oxfordのポッドキャスト番組*In Our Spar Times*において、フォーディズムをめぐる議論のなかで、車に一本のネジをねじこむことが仕事のすべてであるというようなその形態は、まさに工場で菌磨き粉チューブにキャップをはめ込むことを唯一の仕事とする、Charlie Bucketsの父親を想起することができる、との指摘がなされている（Walker 00:20:07-00:22:24）。
- 5 大量生産について、Charles Sabelらは、「単一目的の機械と熟練していない労働力とで標準的な商品を生産すること」と定義している（133）。
- 6 Oompa-LoompaはMr. Wonkaに雇われて工場内部に住んでおり（Dahl, *Charlie* 75）、Mr. WonkaはCharlieを次期後継者に指定した際も、家族ごと工場に住むよう提案をする（158-62）。
- 7 ここでの「ナッツ」は文字通り種実類を指すが、同時に「頭のおかしい人間」を指す「ナッツ」に置き換えることもできる（“Nut”）。理性を欠いたVerucaの異常な強欲さを示唆しつつ、Dahlはここで言葉遊びを試みたものと思われる。
- 8 Dahlの執筆対象読者の変化については、Mark I. Westによる“Interview with Roald Dahl”を参照のこと（63-64）。

引用・参考文献

- Alston, Ann. “The Unlikely Family Romance in Roald Dahl’s Children’s Fiction.” *Roald Dahl*, edited by Ann Alston and Catherine Butler. Palgrave Macmillan, 2012, pp. 86-101.
- Batchelor, Ray. *Henry Ford: Mass Production, Modernism and Design*. Manchester UP, 1994. [『フォーディズム：大量生産と20世紀の産業・文化』、楠井敏朗・大橋陽訳、日本経済評論社、1998年。]
- Cameron, Eleanor. “McLuhan, Youth, and Literature: Part I.” *The Horn Book*, 19 Oct. 1972, www.hbook.com/story/mcluhan-youth-and-literature-part-i-2. Accessed 20 Feb. 2024.
- Chaplin, Charles. *Modern Times*. United Artists, 1936.
- Consumers International*. Consumers International, 2024, www.consumersinternational.org/. Accessed 20 Feb. 2024.
- Dahl, Roald. *Charlie and the Chocolate Factory*. Knopf, 1964.
- . “Lucky Break.” *The Wonderful Story of Henry Sugar and Six more*, Cape, 1977, pp. 199-236.
- . “Pig.” *Kiss Kiss*, 1960; Alfred A. Knopf, 1983, pp. 242-70.
- . “The Way Up to Heaven.” *Kiss Kiss*, 1960; Knopf, 1983, pp. 55-73.
- . “William and Mary.” *Kiss Kiss*, 1960; Knopf, 1983, pp. 17-54.

- Hounshell, David A. *From the American System to Mass Production 1800-1932: The Development of Manufacturing Technology in the United States*. The Johns Hopkins UP, 1984.
- Keyser, Catherine. "Candy Boys and Chocolate Factories: Roald Dahl, Racialization, and Global Industry." *Modern Fiction Studies*, vol. 63, no. 3, 2017, pp. 403–28. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/26421502. Accessed 20 Feb. 2024.
- Lacey, Robert. *Ford, the Men and the Machine*. Heinemann, 1986.
- "Monster, *N.*, Sense 5." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, 2023, doi.org/10.1093/OED/3193780999. Accessed 20 Feb. 2024.
- "Monstrous, *Adj.*, Sense 2.a." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, 2023, doi.org/10.1093/OED/5508492881. Accessed 20 Feb. 2024.
- "Nut, *N.* (1), Sense II.7.a." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, 2023, doi.org/10.1093/OED/4387049994. Accessed 20 Feb. 2024.
- Piatti-Farnell, Lorna. "A Tour of the Cannibal Quarters: Industrial Fantasies and Carnivorous Appetites in Roald Dahl's Fiction." *Otherness: Essays and Studies*, vol.1, no. 1, 2010, pp. 1–15. *The Centre for Studies in Otherness*, otherness.dk/journal/vol-1. Accessed 20 Feb. 2024.
- Pinsent, Pat. "The Problem of School': Roald Dahl and Education." *Roald Dahl*, edited by Ann Alston and Catherine Butler. Palgrave Macmillan, 2012, pp. 70–85.
- Rees, David. "Dahl's Chickens: Roald Dahl." *Children's Literature in Education*, vol. 19, 1988, pp. 143–55. *SpringerLink*, doi.org/10.1007/BF01127092. Accessed 20 Feb. 2024.
- Rudd, David. "Willy Wonka, Dahl's Chickens and Heavenly Visions." *Children's Literature in Education*, vol. 51, 2020, pp. 125–42. *SpringerLink*, doi.org/10.1007/s10583-018-9366-6. Accessed 20 Feb. 2024.
- Sabel, Charles, and Jonathan Zeitlin. "Historical Alternatives to Mass Production: Politics, Markets and Technology in Nineteenth-Century Industrialization." *Past & Present*, no. 108, 1985, pp. 133–76. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/650576. Accessed 20 Feb. 2024.
- Walker, Aled, host. "Marxism." *In Our Spare Times*, episode 6, U of Oxford, 29 June 2016, podcasts.ox.ac.uk/marxism?audio=1. Accessed 20 Feb. 2024.
- Watkins, Tony, and Zena Sutherland. "Contemporary Children's Literature (1970–present)." *Children's Literature: An Illustrated History*, edited by Peter Hunt, Oxford UP, 1995, pp. 289–321.
- West, Mark I. "Interview with Roald Dahl." *Children's Literature in Education*, vol. 21, 1990, pp. 61–66. *SpringerLink*, doi.org/10.1007/BF01464461. Accessed 20 Feb. 2024.
- . *Roald Dahl*. Twayne, 1992.
- Whisler, Timothy R. *The British Motor Industry, 1945–1994: A Case Study in Industrial Decline*. Oxford UP, 1999.